

THE ENTOMOLOGICAL REVIEW OF JAPAN

VOL. I, NO. 1

APR. 1948

日本産 *Anthaxia* 屬に就いての覺書

黒 澤 良 彦

Notes on the genus *Anthaxia* Eschscholtz, 1829  
from Japan (Coleoptera, Buprestidae)

By Yoshihiko Kurosawa

*Anthaxia* 屬は姬吉丁蟲亞科 (Buprestinae) 中では比較的小型の種類ののみを含み、歐亞大陸より北米大陸にかけて無慮 300以上の種を産し、その一部は熱帯アフリカ、南米、及び馬來、スマトラ、ボルネオ等の東洋熱帯地方にまで達して居る。然し現在の日本は歐亞大陸の東端を占めて居るにも拘らず比較の種類少く、僅かに3種類 (中1種は未記録) を産するに過ぎない。而も之等3種の中比較的一般に知られて居るのは唯1種のみであるので、以下にその檢索表を掲げて各種の區別を示し、併せて補足的に記載を附加へることにした。

日本産 *Anthaxia* 屬の檢索表

1. 一體は幅廣く著しく扁平、一様に黒銅色、翅鞘は一面一様に強く小顆粒状をなし全く絹絲光澤を缺く；腹部側縁は完全に翅鞘に依り覆はれ背面より認むるを得ず ..... *quadrifoveolata* Solsky
- 一體はむしろ細型、著しく扁平ならず、一面不規則に微細なる小顆粒状をなし多少共絹絲光澤を有す；腹部側縁は多少共翅鞘より外側方へ露出し背面より認むるを得 ..... 2
2. 前胸背板はむしろ扁平、中央に不明瞭なる縦溝を裝ひ、各後縁角附近に不明瞭なる1陥凹を夫々裝ふ、且つ側縁は赤、綠、オリーブ色、時に鮮青色に彩らる；翅鞘側縁は翅端近く極めて微細なるも明瞭に鋸齒状を呈す ..... *rubromarginata* Miwa et Chūjō
- 前胸背板は僅かに中高、中央に縦溝を缺き各後縁角附近の陥凹も著しく不明瞭、且つ側縁部は前種の如き色彩にて縁取らるることなし。翅鞘側縁は全く鋸齒状を呈せず ..... 3
3. 一體背面は明るきオリーブ様綠色乃至暗オリーブ様綠色、頭部は常に明るき綠色 .....

.....*proteus* Saunders  
 一體背面は暗オリーブ様青銅色乃至暗黒銅色・頭部は常に暗色 .....

..... *proteus* Saunders var. *matsumurae* Miwa et Chūjō

Genus *Anthaxia* Eschscholtz, 1829

*Anthaxia* Eschscholtz, Zool. Atlas, I, p. 9 (1829)

*Cratomerus* Solier, Ann. Soc. Ent. France, Iser., II, pp. 1~2, p. 1. 1 (1833).

*Anthaxia quadrifoveolata* Solsky, 1871 クロヒメヒラタタマムシ (新稱)

(Fig. 1)

*Anthaxia quadrifoveolata* Solsky, Horae Soc. Ent. Ross., VII, p. 359 (1871)

此の属としては稍々大型で體長 6.5 mm 内外, *proteus* を見馴れた眼にはどうしても同属と思へない位特異な種であるがその概要に就いては附圖を参照されたい。

背面は一樣に黒銅色で幾分光澤あり, 稀に幽かながら緑色を帯びることもある。體下は帶青又は帶緑青銅色, 稀に銅色を帯びることがある。肢は帶緑青銅色幾分黒味を帯びて居る。頭部は多少灰褐色の短毛を装つて居るが稀に白色又は灰色の短毛を装ふものがあり之を var. *attavistica* Obenberger と云ふ。私は北海道産の標本の中には見出した事がないが朝鮮産の 1 頭を検して居るし Obenberger は北樺太から記録して居る。アムール, ウツスリー地方には原種に混つて廣く分布するものらしい。兩眼間は雄は幽かに中高, 雌はむしろ壓下されるが兩性共頭楯の上方が不明瞭ではあるが縦に壓下されて居る。觸角は雄より雌の方が長く, 第 5 節より鋸齒状をなす。第 2 節は球狀に近く, 第 3 節は第 2 節の約 1.5 倍, 第 4 節は第 3 節より僅かに短い第 2 節よりは明かに長い。前胸背板及び翅鞘は附圖に依つて大略を知ることが出来ると思ふが, 前胸背板の前縁角は背面から見るとかなり突出して居るが, 側面から見ると前胸腹側板との境が明確でない。學名の由來である背板中央に横に並ぶ 4 個の圓形陷凹は個體に依り一樣でなく判然と 4 個あるもの, 中央の 2 個のみ明かなもの, 又は殆ど全部不明瞭なものまであるが完全に消失したものはまだ見た事がない。翅鞘側縁は僅かに反上するが絶対に鋸齒状を呈しない。體下は粗に灰色の短毛を散布する。前

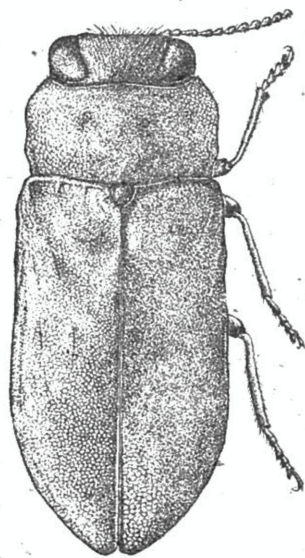


Fig. 1.  
*Anthaxia quadrifoveolata*  
 Solsky.

胸腹板突起はむしろ扁平，ムツボシタママシ屬の夫に似て居り，前基節窩に依り狭められ先端は鋭く齒狀に突出する。腹部末節先端は圓く性的差異はない。後肢附節第1節は第2節の約2倍あり，次の3節の長さを合したものと等長である。

分布：日本（北海道）（新記録），樺太，朝鮮（新記録），東部シベリア。

樺太からは既に三輪勇四郎博士及び中條道夫氏に依つて *Chrysobothris* (!) *quadrioveolata* Solsky の名の下に報告されて居るが北海道及び朝鮮からの記録は之が最初である。然し本種が *Chrysobothris* 屬のものでない事は前肢腿節や複眼の構造に依つても明かである。

北海道では山岳地方に産するがその個體数は餘り多いものではないらしい。私は定山溪及び大雪山層雲峽産の各若干頭を検したが兩地産の個體間にかんりの相異の見出されるのは興味深い事である。

本種の近似種は歐洲中北部からシベリアを経て北米大平洋岸にかけてかなりの種類が記載されて居り，就中バイカル湖を中心とした附近に最もその種類が多い。樺太にも未だ記録はないが *A. ussuriensis* Obenberger と云ふ種類を産する。

*Anthaxia rubromarginata* Miwa et Chūjō, 1935

フチトリヒメヒラタタママシ（新稱）

*Anthaxia proteus* Saunders var. *rubromarginata* Miwa & Chūjō, Ent. World, III, p. 276, pl., fig. 7 (1935)

*Anthaxia proteus* Saunders var. *viridomarginata* Miwa & Chūjō, l. c., p. 276, pl. fig. 5 (1935). (syn. nov.)

*Anthaxia primorjensis* Obenberger, Sbornik. Nar. Mus. Praze, Zool., (B), I, pp. 206 ~ 207 (1938) (syn. nov.)

本種は既に三輪博士及び中條氏の原記載に美しい彩色圖が附せられてあるので詳しい記載は省くが，翅鞘側縁が翅端に近く微細ではあるが明瞭に鋸齒状を呈する事，前胸背板の縦溝及び側縁が縁取られる等の檢索表に挙げた特徴の外に腹板側縁が紅色を呈する等の諸點に於いて明瞭に *proteus* から區別出来る。本種は最初 *proteus* の變種として記載されたものであるが上記の如く明かに別種である。

同じく *proteus* の變種とされた var. *viridomarginata* も明かに本種であるが，その個體變異の一つと見て差支へなく，敢て區別する必要はないものと思ふ。又アムール地方から記載された *Anthaxia primorjensis* Obenberger, 1938 も原記載に依る限り明かに本種の異名である。

本種の分布に就いては原産地の北海道札幌附近と上記アムール地方が知られて居るが，本州でも稀ではあるが廣く分布するらしく，私は山形市盃山で雄1頭を採集し，伊賀正汎氏は大阪府妙見山産の1頭を検されたと云ふ。又朝鮮にも分布し私は忠清北道清州産の1頭を検し得た。



*Anthaxia proteus* Saunders, 1873 ミドリヒメヒラタタマムシ(ヒメクロタマムシ)

*Anthaxia proteus* Saunders, Journ. Linn. Soc. Zool., London, XI, p. 511 (1873)

*Anthaxia proteus* Saunders var. *minuta* Miwa et Chūjō, Ent. World, III, p. 275, pl. fig. 1. (1935)

各種の圖鑑類にも圖説され、日本では北は北海道から南は九州の南端に至るまで分布しその個體數も少なく、又花に來ると云ふ日本産の吉丁蟲としては特殊な性質に依り採集は比較的容易である等の爲最も廣く一般に知られて居る種類である。國外では朝鮮、支那等に分布する。然し朝鮮では極めて酷似した近似種 *A. psittacina* Heyden と混在しその區別もなかなか容易でない。又奄美大島産の種類も本種に極めて酷似しては居るがむしろ台灣産の *A. aeneocuprea* Kerremans に近似した全くの別種である。

本種の寄主植物に就いては多分檜櫟の類であらふと想像して居たが日高義實氏の御話しに依れば全く意外にも松類を害すると云ふ。もつとも外國では他の多くの同属の種が松柏類に加害することが知られては居るが日本では未だ此様な記録がない。前記 *A. quadrifoveolata* もやはり北海道に於いてエゾマツの類に加害するものらしい。

本種は此の属の種類の常として變異の多い種であつて2變種が記載されて居るが、私は下記1變種のみどうやら區別出来るが他の1つ var. *minuta* Miwa & Chūjō は雄の個體變異の中に含まれ區別する要はないものと思ふ。

*Anthaxia proteus* Saunders, 1873 var. *matsumurae* Miwa et Chūjō, 1935

*Anthaxia proteus* Saunders var. *matsumurae* Miwa et Chūjō, Ent. World, III, p. 275, pl., fig. 12 (1935)

上掲の檢索表に示した特徴に依り原型から區別出来る。體背面の色は時に中間型を以て連続するが顔面の色だけは常に暗色を呈し殆ど中間型がない。やはり北海道から九州にかけて産するが私の檢したものは何れも雌のみで雄がない。ところが原型は大部分雄ばかりで雌は極めて稀である。然し雌は全部此の型ばかりであるかと云ふとそうでもなく極めて稀ながら顔面の綠色を呈した雌も見出されるのでやはり此の變種を區別した方が妥當であると思ふ。

尙本種は Obenberger に依れば *Anthaxia* 属の中の *mundula* グループに入ると云ふ。此のグループに属する種類はヒマラヤを中心として西はシリヤからバルカン更に北アフリカに及び東は支那、台灣、朝鮮、日本から遙か太平洋を越して北米のカリフォルニアからペンシルヴァニアにかけて地球を帯狀に取巻いて分布する。ウバタマムシ属 (*Chalcophora*) やアヲタマムシ属 (*Eurythya*) もほぼ之と似た分布状態を示して居り、吉丁蟲科中之と相似た分布を示すグループの多いのは注目しやう。



# 日本産ヒゲナガコバネカミキリ屬に就いて

林 匡 夫

On the genus *Molorchus* Mulsant from Japan  
(Coleoptera, Cerambycidae) By Masao Hayashi

ヒゲナガコバネカミキリ屬 *Molorchus* は天牛亞科 Cerambycinae, Molorchini 族中の一屬で、小型の種で占められ、その發生は比較的早期であるため、從來あまり注意をひくに至らず、我國からは四種が夫々斷片的に記録されて來たに過ぎない。筆者はかねて本屬に注意し研究を進めつつあつたが、最近に至り從來全く記録を見ない一種及び誤つた名の下に取扱はれて來たもの一種を検出し、且多くの分布上の新事實をも知り得たので、以下に一應記載報告することとした。

本屬の分類に當り特に意を用いた點は、前胸自體及び背板上の隆起（瘤起）又は光澤部並びに點刻の形狀；翅鞘の形狀、觸角の長さ等で色斑は變化の多いことを認めたので、第二次的に取扱つた。

本稿を草するに際し日頃絶大なる御援助を賜つてゐる戸澤信義、大林一夫の兩氏並びに貴重な標本多數を提供、筆者の研究を援助された伊賀正汎、江田茂、松田勝毅の三氏に深謝する。

## I. 新種の記載

*Molorchus* (*Linomius*) *japonicus* sp. nov. ヤマトヒゲナガコバネカミキリ  
(新稱) (Pl. I, Fig. 1)

體は細小、赤褐色、觸角、口器及び脚は黄褐色を呈する。頭部は短く、顔面は稍々暗色を帯び鈍い光澤があり、大點刻を裝ひ、複眼間に極めて細い一縱溝を具へる。觸角瘤は極めて小さいが判然として居り、觸角は細く糸狀で稍長く、腹節中央を越え三節以下全節に長毛を生ずる。柄節は太く、第三節は第四節より僅かに長く第五節と略々等長、第五乃至八節は漸次短く、第九節は第八節より明かに短く第十節と殆んど等長であるが、末端第十一節は第十節より僅かに長い。前胸は巾より長く、前・後方に僅かに狭まり後縁前方で巾廣く縊られ、その前方で最も巾廣く、兩側に小突起を具へる。背面は頭部同様の点刻を密布し、爲に殆んど網目狀を呈し、中央後方に光澤を有する小縱隆一個を具へ、各點刻は夫々白色の長毛を伴ふ。小楯板は凹陷し、小さく略々三角形を呈し、微小點刻を裝ひ暗色の微毛を生ずる。翅鞘は肩部の隆起のあまり發達しない長舌狀を呈し、兩側は略々平行、前胸より僅

かに短く且前胸幅の二倍の長さ、又各翅鞘は夫々基部の巾の二倍以上の長さを有し、先端に向ひ僅かに狭まり、先端は丸く、稍々不規則な數條の小點刻列を有する。基部及び中央より後部は光澤ある帯赤黒褐色を呈し、殘餘の中央部より前方には横帶狀に巾廣く半透明の淡黄色を呈する。體下面は暗赤褐色。特に胸部下面は暗色を帯び、光澤を有し全面に淡色の微毛を生ずる。脚は淡黄色の長毛を生じ、腿節は端部で明かに膨れ、脛節及跗節は腿節より濃色である。

體長；5.2 mm. 體幅；1 mm.

Holotype; 1 Female Specimen, Kyuanji, Kiyotakimura, Mishimagun, Osakufu (大阪府三島郡清瀧村久安寺). July 2nd, '40, Coll. M. Iga.

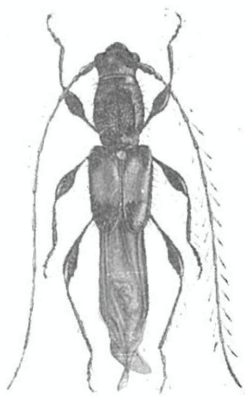
本種は近似の *M. (L.) ishiharai* Ohbayashi と前胸背の構造、背板上の瘤起、點刻の形狀等によつて明らかに區別出来る。

## II. 所謂ヒメコバナカミキリの學名に就いて

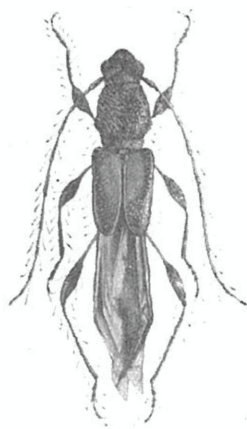
先年玉貫光一、大石貞俊兩氏 ('37) が九州北部より、從來ヨーロッパ、コーカサスより知られてゐた *M. (L.) umbellatarum* (Schreber) を日本未記録種として圖示記録され、ヒメコバナカミキリと新稱し興味ある隔離分布の事實として報告された種の學名に就いて論ずる。この學名を有する種がはたして分布するや否やの點に水戸野武夫氏 ('40) は否定的疑問を持ち、その目錄に分布の疑しい種として一應種名を留められ、次いで松下眞幸博士 ('43) は該種は全くの *M. ishiharai* Ohbayashi の synonym であつて、眞の *M. (L.) umbellatarum* とは異ると斷定されたが、その理由に就いては何等説明を加へられなかつた。併し一應これでこの問題に就いては解決をしたかに見えた。即ち後、關公一氏 ('46) はその目錄に於て *M. ishiharai* の分布に九州を追加して、*M. umbellatarum* を全く除かれ、又松田勝毅氏 ('46) は小倉市福智山の天牛目錄中に *M. ishiharai* を記録されたのは、いずれも前述松下博士の所論を疑なく容認し、この疑問種を單に *ishiharai* そのものと認めたものか、或ひは眞の *ishiharai* と混じて考へて居られるものと解せられる。筆者は玉貫・大石兩氏の記録は記載を伴つて居ないが附圖を檢討した結果次の點でこの種に就いて疑問を持つに至つた。即ち眞の *M. (L.) umbellatarum* は觸角は兩性共十一節で雄では體より明らかに長く、雌でも體より僅か長く末端節には附屬物を有しないのにもかかはらず、圖示された種の觸角は明らかに十二節を有し、且體長より明かに短く別種と認める他ないので、この點に就て玉貫氏にお尋ねした處戦時中の郵便不著か何かの理由で遂に御返事に接せず終つた。附圖は蠶家の不注意により往々にして觸角節を一節多くしたり少くしたりする事實があるが、觸角の長さの體長に對する割合に就いてはその誤が少い様に思ふ。筆者はこの附圖は一應著者が *M. (L.) umbellatarum* と同定された種であることを前提として觸角節を誤りと見なしたが眞にこの圖の通りの種が存在し且これが雄を圖示したものとすればそれは *Linomius* 亞屬のものでなく *Molorchus* (s. str.) に含まれるが、雌であれば一新亞屬を創設せねばならなくなる程の特徴であるし、一應附圖ではこれ以上突込んだ檢討が不可能のため北九州産の *Molorchus* 屬標本を友人諸



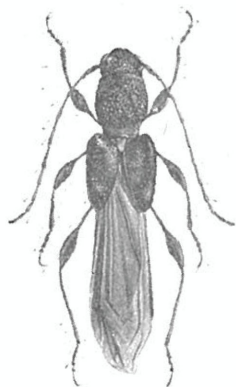
1



3



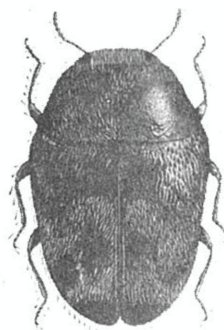
2



4



5



6

1. *Molorchus (Linomius) japonicus* Hayashi ヤマトヒゲナガコバネカミキリ (新稱)
2. *Molorchus (Linomius) kojimai* (Matsushira) コジマヒゲナガコバネカミキリ (改稱)
3. *Molorchus (Linomius) ishiharai* Ohbayashi カヘテヒゲナガコバネカミキリ
4. *Molorchus (Linomius) takeuchii* Ohbayashi タケウチヒゲナガコバネカミキリ
5. *Nothorhina muricata* Dalman ケブカヒラタカミキリ
6. *Paratrachys hederae* Saunders ミスツケシタマムシ



賢の好意により相當數集め、檢した處、*M. takeuchii* 及右に類似するが甚だ細型の一種を檢出することが出來た。この後者は北九州一帯に春相當發生するものの様で觸角は雄では體長より僅かに長く雌では體長より少し短く、玉貫・大石兩氏の記録圖示種を想像せしめ得るものであつたので力を得て該當する學名の探究を行つたが全く無く一時新しい名稱を附與すべきかと考へたが更に近縁屬中に類似の種を求めた處、松下博士('39)が横濱本牧より一雌を以て記載公表された *Epania kojimai* の記載に完全に一致することを知つた。*E. kojimai* は大林一夫氏('42)が *M. takeuchii* の Synonym であるとされた以外に本種に就いての記録を缺き、筆者は *E. kojimai* は *takeuchii* ではないが、*Molorchus* 屬のもので、この疑問種に當るものとの疑念を持つて、松下博士にその點教示を願つたが、逝去の前であつて詳細な回答に接することが出來ず、唯 *Molorchus* 屬ではなく *Epania* に入るものと信ずる旨の御返事を頂いたに留つた。併し本種の體の構造特に前胸背板の形狀は全く *Epania* よりも *Molorchus* 特に亞屬 *Linomius* に含めるのが最も適當と考へられる處の "auf der Scheibe ..... drei glatte Erhöhungen vorhanden" (*E. Kojimai* 原記載より引用) を呈して居るので、本種を生かして (*takeuchii* との相違は後出檢索表参照)、*Molorchus* (*Linomius*) に含め、この北九州産の疑問種に對する適當な學名としたいと考へるに至つた。處が最近松田氏より送附を受けた本屬標本に *M. (L.) kojimai* (*Matsushita*) に混じ、眞の *ishiharai* を發見したので、確實に *ishiharai* が九州にも分布することが判明した。その考へから前の附圖特に前胸の構造を檢するとこれは *ishiharai* の雌を圖示したものではないかと考へ得る點もあり、左様な觀點よりすれば從來の業績をあまり混亂させずにこの問題を完全に解決し得るので、ここでは一應玉貫・大石兩氏の記録された種は松下博士の斷定の如く *ishiharai* の且雌であつて、觸角の點は附圖の誤であること、關・松田兩氏の記録は少くとも正しいものであることを認めて置き且更に *M. (L.) kojimai* (*Matsushita*) が九州に分布することを記録することとする。次に九州産の *kojimai* の標本に就いて記して置く。(Pl. I, Fig. 2)

小倉市福智山 (1♂, Jun. 29, '46; 1♀, May 4, '47松田氏採); (1♀, May 20/39, 天野昌次氏採) 大分縣祖母山 (1♂, Jul. 26/40, T. Matsumoto 氏採) 鹿兒島 (2♀, Jun. 12/41)

尙本種の和名はコシマコバネカミキリとされてゐるが本屬の種に移された爲他にならひコシマヒゲナガコバネカミキリと改稱して置く。

### III. 本屬の亞屬及び種の檢索表

1. 複眼は大腮基部より離れて位置する。觸角は雄は十二節、體より遙に長く、雌は十一節、體長に略々等しい。第三節は柄節より甚だ長い。頭部は、明かに長く且兩側平行の顆鬚板を有し、頬は複眼前方に於て丸く發達する (*S. G. Molorchus* s. str.) 體は黒色、翅鞘・觸角及び脚は赤褐乃至黒褐色、前胸は長く中央は太く後縁は前縁より狭められ、正中部に小瘤起及其の兩側方に長い各一個の縦隆があり頂部は光澤を有する。翅鞘は短い楕形で後方に向ひ狭められ翅端は丸く、背面上中央稍々後方に斜行する淡黄半透明の隆起紋を有する。體長: 6-13mm. Europe, Siberia, Transcaucasia, Caucasia, Manchuria, Saghalien, Corea,

- Japan (Hokkaido, Honsyu) .....  
 ..... **M. (s. str.) minor** (Linne) シラホシヒゲナガコバネカミキリ
2. 複眼は大腮基部に近く位置する。觸角は兩性とも十一節、第三節は柄節と等長か又は短い。頭部は、非常に短い額頤板と複眼前方で齒狀を呈する頬骨を有する (S. G. **Linomius Mulsant**)..... 3
3. 前胸背板の點刻は極めて大きく且密布され、爲に殆んど網目狀を呈する。翅鞘は長舌狀で前胸より僅かに短く、前胸背幅の二倍、各翅鞘は夫々基部の二倍以上の長さを有し先端に向ひ漸次狭まり、先端は丸い。體は細小、赤褐色、口器・觸角は黄色、肢はより淡色。雌の觸角は腹部中央を越える。第三節は柄節と殆んど等長、前胸は巾より長く、背板中央稍々後方に光澤ある小縦隆一個を具へる。翅鞘肩部の隆起は明かでなく、稍々不規則な數條の點刻列を有し、基部及中央より後方は光澤ある帶赤黒褐色を呈し、殘餘は廣い横帶狀に半透明淡黄色を呈する。體長 5.2 mm. Japan (Honsyu) .....  
 ..... **M. (L.) japonicus** Hayashi ヤマトヒゲナガコバネカミキリ (新稱)
4. 前胸背板の點刻は比較的大きいが不規則且稍々、疎布せられ、網目狀を呈しない ..... 5
5. 前胸は比較的細長、小點刻を密に強く裝ひ、背板上には正中部に長い一個の小縦隆及びその兩側より前方に彎曲し前縁後方で互に結合する隆起を有する。體は細長、光澤ある栗茶色、頭部前胸は濃色。觸角第三節は第一節より僅かに短い。翅鞘は前胸より僅かに長く各翅鞘は夫々の基部の巾の二倍の長さを有し、肩部は稍々發達し、中央部に半透明淡黄白色の基部側に波狀に凸出する巾廣い横帶を有する。體長 5—6mm. Japan (Honsyu, Kyusyu).....  
 ..... **M. (L.) ishiharai** Ohbayashi カヘデヒゲナガコバネカミキリ
6. 前胸は比較的巾廣く、中央少しく後方に圓錐形の側方小突起を有する。全面に比較的大きい點刻を密布する ..... 7
7. 前胸は側方に丸く膨出する。背板上には前縁中央・その少し後方の兩側及び正中部少し後方の四點に夫々光澤ある平滑部を有する。翅鞘は前胸より僅かに長く、肩部隆起のよく發達した心臟形を呈し、後方に強く狭まる。各翅鞘は基部巾の二倍の長さに達しない。體は比較的巾廣く黒褐色、頭部・前胸は黒く、翅鞘は小點刻を散布し、内側は淡黄褐色、外縁及翅鞘は褐色で光澤を有し、脚は黄褐色。體長 : 6.6-9mm. Japan (Honsyu ? Kyusyu, Loochoo) .....  
 ..... **M. (L.) takeuchii** Ohbayashi タケウチヒゲナガコバネカミキリ
8. 前胸は比較的細く、側方に強く丸く膨れない。背板上には前縁後方中央との間の兩側及び正中部稍々後方に三個の光澤ある平滑部を有する。翅鞘は明かに前胸より長く、肩部の發達は鈍く、兩側は略々平行で先端前で狭められる長舌狀を呈する。各翅鞘は基部巾の二倍の長さを有する。體は細く黒色、觸角は黒褐色、翅鞘は内側淡黄色を呈する部分をを除き暗褐色、肢は腿節の基部暗色を呈する以外赤褐色である。體長 : 7—8mm 前後. Japan (Honsyu, Kyusyu)..... **M. (L.) kojimai** (Matsushita) コシマヒゲナガコバネカミキリ (改稱)

## IV. 新分布其他

1. *Molorchus* (*Linomius*) *ishiharai* Ohbayashi カヘデヒゲナガコバネガミキリ



カヘデノコバネハナカミキリ) (Pl. I, Fig. 3)

Ohbayashi, Trans. Kansai Ent. Soc., 7, p. 12, pl. II, fig. 2, (1936)

M. (*Linomius*) *umbellatarum*, Tamanuki et Oishi, Mushi, IX (2), p. 111, f. 1, (1937)

M. (*Sinolus*) *ishiharai* Mitono, Cat. Col. Japan., 94, 8, Ceramb., p. 62, (1940); Seki, Cat. Longic. New Japan, p. 41, (1946)

本種前胸背の隆起は一見不明瞭で且個體により發達の程度に差があるが、明らかに存在して居り未だ全く之を缺いた個體を検しない。最もよく發達したものでは正中部に存する一縦隆の兩側のものは前方では前縁後方で互ひに結合し、後方では外方に彎曲して、後縁隘狀部側縁に達し更に側方に迄のびる。故に本種は前胸背板上に relief を缺く點で造られた S. G. *Sinolus* Mulsant には入らず、やはり *Linomius* に含まれるものである。目下我國に産することの判明したもので *Sinolus* に入るべきものはない。體の色彩及斑紋には變化があり暗色を帯びる個體では、翅鞘中央の半透明淡黄白色帯が縮小して一見 M. (L.) *kojimai* の如き斑紋となる傾向が見られる。腿節の肥大度は M. (L.) *takeuchii* より弱く、M. (L.) *kojimai* より少しく強い。最近江田茂氏より伯耆大山産 (1♂, 1♀, Jul. 25'37) 松田勝毅氏より小倉市福智山産 (4♂♂, Apr. 28'46) (1♂ 1♀, May 4'47) の本種を検することが出来た。何れも新しい分布地である。本種に就いては原著者である大林一夫氏より Cotype を拜借して研究するを得た。體の構造より検討するのに本種はヨーロッパ、コーカサスに分布する M. (L.) *umbellatarum* Schreber に最も近縁の種で或ひは該種の極東又は日本に於て變化したものが本種となつたものではないかと考へる。

2. *Molorchus* (*Linomius*) *takeuchii* Ohbayashi タケウチヒゲナゴバネカミキリ (タケウチモモブトコバネカミキリ) (Pl. I, Fig. 4)

Ohbayashi, Nippon no Kotyu, I (1), p. 6, (1937); Kamiya & Ohbayashi, ditto, p. 43, fig. 5, (1937); Kamiya, Akitsu, I (3), p. 97, (1938); Ohbayashi, Ins. World, Gifu, 46 (537), p. 15, (1942); Seki, Ins. World, Gifu, 48 (562), p. 12, (1944).

記録に用いた標本では顯著な個體變異を殆んど認められなかつた。筆者の今回檢し得た標本はいずれも九州本島のものばかりで、原産地である屋久島、大林氏('42)の本州横濱及び關氏('44)の奄美大島の標本は全く見る事が出来なかつた。即ち鹿兒島産 (1♂, Jul. 3'41, Coll. M. Ohyama; 1♀, Jun. 27'41, Coll. I. juin, 1♀, Jun. 3'39, Coll. M. Sasaki; 1♀ May 29, 40), 鹿兒島附近 Shibisun産 (1♀, Jul. 11'40, Coll. H. Miyasaki), 祖母山産 (1♀, Jun. 22'41, 1♀ 不明) の七頭である。九州本島からは新しい記録である。九州本島産の本種の體長は8—9mmの範圍に入る。(Type, 8mm.)

尙大祿氏が GALLIOTS 氏の採集品により本種を横濱から記録され E. *kojimai* を synonym とされたのは E. *kojimai* が *Molorchus* 屬のものであり且横濱がその Type Locality である處から左様取扱はれたものと考えられる。本種は従つて目下の處本州には産しないものと考えるのが穩當であらう。又關氏の記された體長6.6mmは本種のものとしては異常に小型の點で注意をひき記載によつても其の形態に多少の相異點を認めてゐる。

附記 他に神崎精治氏[蟲の世界, 4 (11/12), p. 10 (1941)] が群馬縣法師温泉から本屬のものを報告されてゐるが、記載を伴はず、その正確な種名を判定することが出来ず一應割愛した。



## 糞 蟲 覺 書 (II)

中 根 猛 彦

Notes on two coprophagous Coleoptera of Japan (2)

By Takehiko Nakane

セマダラマダグソコガネの學名について

On the specific name of '*Aphodius variabilis*, Kato' 1933.

加藤正世氏が原色日本昆蟲圖鑑8に '*セマダラマダグソコガネ* *Aphodius variabilis* Waterhouse' の名の下に *Aphodius* の1種を圖示されてから、多くの地方昆蟲誌にこの名が用ひられてきた。又、その後三輪・中條兩氏が日本産鞘翅目分類目録5金龜子蟲科の中で *A. variabilis* Waterh. なるものが *A. nigrotessellatus* Motschulsky のシノニムであることを明示されてから、この學名を使用した昆蟲目録もみられてゐる。しかし乍ら、加藤氏の圖示されたものは一見似てはゐるが決して *Aphodius variabilis* Waterh. = *A. nigrotessellatus* Motsch. ではなくして、全然別種の *A. obsoletoguttatus* Waterh. であることが野村鎮氏及び筆等の調査によつて判明してゐる。新しい圖鑑の出版が困難な現在、既刊の圖説類の誤を訂正して之を活用することは最も現状に即した方法だと思はれるので、ここにこの種及び眞の *A. nigrotessellatus* を圖説しておきたいと思ふ。

*Aphodius obsoletoguttatus* Waterhouse セマダラマダグソコガネ (ウスモンマダグソコガネ) (Fig. 1)

*Aphodius obsoletoguttatus*, Waterh., Tr. ent. Soc. Lond. 1875, p. 86.

*A. (Volinus) obsoletoguttatus*, Ad. Schmidt, Arch. f. Naturg. 79. A. 11, p. 148 ;—, Das Tierreich 45, Aphodiinae, 1922, p. 178; 中根, 昆虫世界 48, 1944, p. 15

上翅側方が光澤を欠くことによつて明かな種である。黑色、上翅は黄褐、側部は前方幅廣く暗色、翅端へ向ひ淡赤褐色を呈する。頭部は中央弱く隆まり、密に粗く點刻され、額會合部はかすかな3凸起を具へる。頭楯は中央彎入し、兩側は圓まる。

頬は眼より側方へ張出す。胸背は前方へ弱く圓まつて狭まり、背面に於ても密に餘り大きくない點刻を裝ひ、後角は鈍い。小楯板は明かに點刻される。上翅は側方に於て短毛を裝ひ、細く條刻され、條刻上の點刻は間室の縁部を侵してゐる。間室は

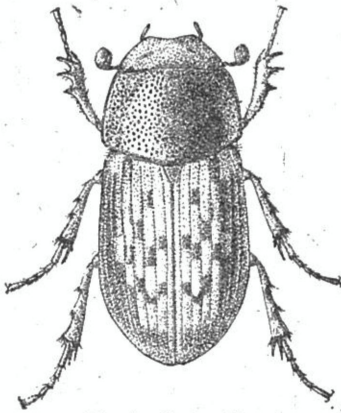


Fig. 1. *Aphodius obsoletoguttatus* Waterh.

弱く隆まり、明かに點刻され、側方に向ひ密で且強くなり、横皺状になつてゐる。暗色紋の配置は次の通りである。第2間室に2紋：中央前後にあり、第3間室に3紋：基部近くと第2間室の紋と夫々接してやや後方に各1紋、第4間室に2紋：第3間室の2紋の少しく前方に、第5間室に3紋：基部と第3間室の2紋と同位置にあり、中央のものは時に長くのびて前後紋に近づく。側紋は第6—10間室にまたがり、肩部を残す。第6間室では中央付近で一旦切れることが多い。後附基節は上端棘より長く、又續く2節よりも長い。本種の上翅斑紋は一部消失することがあり時には背面中央の點紋が殆ど消失する場合も見られる、體長4mm.内外。分布—日本、朝鮮、支那。

*Aphodius nigrotessellatus* Motschulsky クロモンマグソコガネ (Fig. 2, 3)

*Aphodius nigrotessellatus*, Motsch., Bull. Soc. Moscou, 39, i, 1866, p. 170; Waterh., Tr. ent. Soc. Lond., 1875, p. 91; Lewis, Ann. Mag. Nat. Hist. (6) xvi, 1895, p. 90.

*Aphodius variabilis*, Waterh., Tr. ent. Soc. Lond., 1875, p. 90.

*Aphodius* (*Calaphodius*) *fundator* Reitt., Verh. Ver. Brünn, 30, 1892, p. 230.

*Aphodius* (*Aphodaulacus*) *nigrotessellatus*, Ad. Schmidt, Arch. f. Naturg. 79, A. 11, 1913, p. 146; —, Das Tierreich, 45, Aphodiinae, 1922, p. 200; 中根, 昆虫世界, 48, 1944, p. 15.

體は長めで黒色。頭部及び胸背の側縁は淡色、上翅は黄褐色で黒色の條紋を有する。頭部は明かに密に、前方やや皺状に點刻され、額會合線はかすかな隆起を具へる。頭楯は幅廣く切斷狀で弱く彎入する。頬部は長い剛毛を具へ、弱く角をなして張出す。胸背は後方幅廣く、かなり密に明かに點刻され、中央はたてに滑らかな線を有する。小楯板は球に點刻される。上翅は條刻上に強い横位の點刻を具へ、間室は弱く隆まり、翅端前及び側方に於てはより密に強く點刻され、且毛を裝ふ。斑紋は次のように位置する。第2間室に2紋：中央、前後に、第3間室に2紋：第2間室の紋に接して、第4間室に2紋：第3間室の2紋の夫々直前に、第5間室に2紋：基部と第4間室後紋に接してあり、第6—8, 9間室にまたがりた2紋が肩部より第5間室後紋のあたりまでのびる。その外側は濃褐色で翅端部までのび、後方では淡褐色を呈する。時に之

等各の紋は消失したり、又は第2, 3間室の紋は合一する。體下面是暗褐色、側方は點刻され毛を裝ふ。後附節上端棘は附基節よりやや短く、後者は續く2節を合した

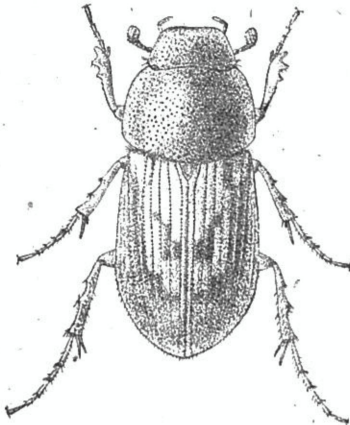


Fig. 2. *Aphodius nigrotessellatus* Motsch. ♂

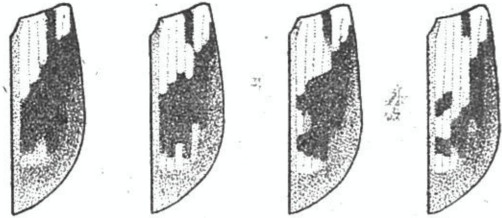


Fig. 3. *Aphodius nigrotessellatus* Motsch.  
の上翅斑紋の變化

と略同長。雄：前脛節端棘は先端へ細まらず同幅で、先端彎曲する。胸背は側縁圓まり、背面は疎にやや細かく點刻され。中脛節下端棘は極めて短く、先端は鈍い。雌：前脛節棘は尖り、胸背は側方はかなり密に中様度に點刻され、中脛節端棘は尖る。本種の上翅斑紋はかなり變化がある。體長、6mm、内外。分布。日本、朝鮮、支那、トルキスタン、シベリヤ。

文献：Waterhouse, C. O.: On the Lamellicorn Coleoptera of Japan. Tr. ent. Soc. Lond. 1875; Lewis, G.: On the Lamellicorn Coleoptera of Japan; and notices of others, Ann. Mag. Nat. Hist. (6) xvi, 1895; Schmidt Ad.: Das Tierreich, 45, Aphodiinae, 1922; 加藤正世：分類原色日本昆虫圖鑑. 8, 1933; 中根猛彦：糞虫覺書 (1), 昆虫世界, 48, 1944.

## 天 牛 の 研 究

大 林 一 夫

Studies of Longicornia. By Kazuo Ohbayashi

I. *Nothorhina muricata* Dalman ケブカヒラタカミキリ (新稱) (Pl. I, Fig. 5)  
Dalman, Schönh. Syn. Ins. I, 3, App. 1817, p. 193—Aurivillius, Col. Cat. 39, 1912 p. 17—Planet,  
Encycl. Ent. II. Longic. France, 1924, p. 242. f. 205.

體は光澤ある黒褐色、全體に長毛を密生し體下面是稍淡色、觸角および肢は赤褐



色、前胸背板中央に赤褐色の一紋を有し、小楯板は黒色である。頭部は密に點刻され、複眼後縁近くまで前胸に挿入されている。複眼は大きく前方に於て殆んど凹陷していない。觸角は複眼前方で大顎の基部後方に着生し、着生部は相當離れ、翅鞘の半ばを僅に越すにすぎない。第一節は稍膨大し、第二節は第五節の二分の一で第三節より僅に短い。第三節から第五節まで順次長くなり、第五節乃至第十一節はほぼ同長である。前胸背板は幅より遙に長く、前後縁に向つて狭められ、前後縁角とも圓味を帯びる。背面兩側にヤスリ目狀の隆起があり、中央部はただ粗に點刻され點刻を欠く中央線が僅に認められる。小楯板は三角形を呈する。翅鞘は前胸背板より僅に幅廣く、兩側は殆んど平行し、先端は幅廣く丸められる。不規則に點刻を密布し、各三條の不明瞭な縦隆があり、うち二條は背面に、一條は肩部の下から發して何れも翅端近くで消失する。各腿節は稍膨大し、各脛節は腿節より短く、各跗節の第一節は他の節よりも長い。體長 8 mm.

產地—1♀, 山梨縣昇仙峽 X, 6:1940. 東野光治氏採集

本種は中部および北部歐洲に分布し、Planet によれば野生のマツから採集され、雄の觸角は Mulsant, Lacordaire などの學者により十二節を持つと言われているが第十一節に附屬物があると言われる。この記録に用いた標本はアカマツ *Pinus densiflora* の樹皮下より採集されたもので日本から未記録であり、隣接地帯からの記録を欠くが隔離分布と考えるよりは將來アジア大陸からも發見される可能性を信じたい。なお本種はただ一種をもつて一屬を代表しており、*Nothorhina Redtenbacher* も勿論未記録でありケブカヒラタカミキリ屬と新稱する。本屬は *Tribe Asemmini* に屬し *Asemum* の直後におかれている。

## 2. *Necydalis* (s. str.) *hirayamai* n. sp.

♀. 體は鮮かな赤褐色で、複眼、第一節を除く觸角全部、第三乃至第五腹節は黒色、後肢先端の三分の一、跗節および脛節の先端部は黒色を帯ぶ。頭部には明瞭な長溝があり、額片は細密に點刻される。額は粗大に點刻され、額は複眼直径の半分で額顛板は強く突出する。觸角は第二腹節の先端に達し、第三節は第一節または第五節より短く、第四節は非常に短く第五節の約二分の一、第五節乃至第十節はほぼ同長、第十一節は第五節より稍短く先端の尖つている附屬物が明らかに認められる。前胸背板は幅より遙に長く、前縁は後縁より僅に幅狭く、前縁後方は幅廣く、後縁前方は深く縊られ、兩側中央部は強く膨大する。背面は隆起し縦溝がある。不規則に大きな點刻を密布し、背面には細點刻がある。光澤は弱く黄金色の細毛を兩側には密に、背面には粗に裝う。小楯板は後縁に黄金色毛が生えている。翅鞘は前胸背板より稍長く、基部の幅と同長である。先端に向つて稍狭められ、先端は幅廣く丸

められている。小楯板の後方、縫合部上で稍凹陷し、背面に沿つて淺く凹陷している。肩部は僅に突出し、翅鞘先端に近く稍隆起する。不規則に大きな點刻を密布し、黄金色の細かい長毛が生えている。前胸背板突起は先端に向つて明瞭に擴がつている。腹部は微細な點刻があり、後肢跗節の第一節は残りの各節を合した二倍もあり、第二節は第三節より稍長い。體長 26mm。

產地—模式標本1♀，台灣省井上溫泉，VII, 13: 1938, 平山修次郎氏採集（平山博物館藏）

本種は歐洲に産する *Necydalis major* L. に稍似るが全然異つた色彩を有し、♂に於てなほより長い觸角を有することにより區別出来る。

### 3. *Necydalis* (s. str.) *marginalis* n. sp. フチトリホソコバネカミキリ（新稱）

♂. 體は黒色で觸角、額片、肢、第一第二腹節は淡褐色乃至鮮黄色、第二腹節の後縁、中肢脛節の先端部、後肢脛節の先端および脛節は黒色を帯び、翅鞘の兩側は幅狭く赤褐色に縁取られている。頭部には明瞭に長溝があり、額片は光澤があつて細い點刻を密布する。額も細い點刻を密布し、額は複眼直徑の半分より明らかに短く、額板は膨大して側方へ突出する。觸角は第一腹節後縁に達し、第三節は第一節より稍短く、第五節よりも明かに短い。第四節は第三節より遙に短く、第五乃至第十節はほぼ同長で、第十一節は第五節より短く、附屬物は不明瞭である。前胸背板は光澤があり、幅より稍長く、前縁は後縁より稍幅狭く、前縁後方は強くそして深く、後縁の前方は幅廣く稍深く縊られる。兩側は強く膨大し、背面は隆起して縦溝がある。大きな點刻を密布し背面には細點刻が粗にある、兩側および基部の縊れの上に黄金色毛がある。小楯板は黄金色毛で覆われている。翅鞘は前胸板の幅と稍等しく、基部の幅と同長で、先端に向つて稍狭まり、先端は幅廣く丸められている。小楯板後方の縫合部上で稍凹陷しているが背面に沿う凹陷は認められない。肩部は餘り突出せず、翅鞘内方は稍隆起し、大きな點刻を密布し、黄金色の細毛が生えている。後胸は細點刻を密布し黄金色毛が稍密に生えている。腹部の點刻は微細で、雄の第五腹板はその全體の長さに於て深くまた非常に幅廣く凹陷し、第四腹板は中央に短い縦溝がある。後肢跗節の第一節は第二第三節を合したよりも短く、第二節は第三節よりも明かに長い。體長 21.5 mm

產地—模式標本1♂，米澤市花澤 VII 7: 1941 黒澤良彦氏採集（平山博物館藏）

本種は日本に産する *Necydalis giganteus* Kano. に稍似るが色彩および體毛などによつて明かに區別され、第四第五腹節下面の凹陷部の形狀は歐洲に産する *Necydalis ulmi* Chevrolat に酷似している。



## 喜界ヶ島産吉丁蟲 2 種に就いて

黒 澤 良 彦

過般大林一夫氏を通じ青山省三氏が奄美群島喜界ヶ島にて採集された吉丁蟲 2 種の御惠與を受けた。私の知る限り喜界ヶ島からの吉丁蟲の報告は全く無く、又 2 種共分布上注目すべき種類であるので此の機会に報告する。

私の手許へ齎らされた標本は次の 2 種である。

*Paratrachys hederæ* Saunders, 1873 ミスデケシタマムシ (Pl. I, Fig. 6)

*Paratrachys hederæ* Saunders, Journ. Linn. Soc. Zool., London, XI, p. 523 (1873)

*Trachys hypocrita* Fairmaire, Ann. Soc. Ent. France, p. 349 (1888)

佛印のトンキンから記載された *P. hypocrita* Fairmaire, 1888 が異名になつたので本種の分布も一躍日本(本州, 九州), トンキンとなつた。然し九州では福岡, 天草, 鹿児島等の産地が知られて居るにも拘らず, 九州とトンキンとの間の産地が皆目知られて居ない。従つて奄美諸島は勿論琉球列島全般からも本種の記録が無く, 之が琉球列島に於ける最初の記録である。台湾や南支那から本種が記録されるのもそう遠い將來ではあるまい。喜界ヶ島産は次の 1 頭である。

1♂, 喜界ヶ島(8. VI. 1935, 青山省三採集) 此の標本は私の手許にある九州福岡市にて白水隆氏が採集された 20 餘頭の標本の何れよりも小型で體長 2.7mm (福岡産は 3.1~4.0mm) を算するに過ぎないが其他の點に於いては何等顯著な差異がない。

*Coraeus hastanus oberthuri* Lewis, 1896 ミドリナカボソタマムシ

*Coraeus oberthuri* Lewis, Ann. Mag. Nat. Hist., (6), VIII, p. 335 (1896).

本種は従來琉球, 台湾に産するものをセラムから記載された *C. bajulus* H. Deyrolle, 1864 に同定され又一方奄美大島にはヒマラヤから記載された *C. hastanus* Castelnau & Gory, 1841 と *bajulus* の兩種が産し *C. oberthuri* Lewis, 1896 は後者の異名として取扱はれて來た。其後 *bajulus* は *hastanus* の異名に過ぎない事が明かになり, 台湾から奄美大島まで唯一種 *hastanus* のみが分布するものとされ琉球のも台湾のも何等區別される所がなかつた。所が最近 They は琉球産の個體が翅端の割られ方に於いて眞の *hastanus* と異ると云ふので *oberthuri* を *hastanus* の亞種として復活した。此の They の説は琉球産の多數個體を見てないらしく承服出來ぬ點もあるが, 八重山群島より奄美群島に亘る琉球列島産の個體は台湾産のものに比べて, (1) 翅鞘は著しく金綠色を帯び藍色又は青綠色を呈しない。(2) 翅



端の刻れは著しく強い。等の差異を見出し得るから台湾産の個体が原型より區別されない限りやはり *Thery* に従つて琉球列島のもを亞種として區別するのが妥當であらう。

本種の分布は奄美群島が最北で之より以北には及んで居ない。

喜界ヶ島産は次の2頭であるが前種に似て他の琉球列島産(體長11.1~12.6mm)に比べると雄は著しく小型(體長9.8~11.3mm)である。

1♂, 1♀, 喜界ヶ島(6.V.1935, 青山省三採集)

尙終りに臨み貴重な標本の御惠與に與つた大林一夫氏に厚く御禮申上ると共に採集者青山省三氏にも併せて深く敬意を表する次第である。

追記——本稿脱稿後九州大學農学部昆蟲學教室へ新に寄贈された奄美大島産昆蟲標本中に *Paratrachys nederae* Saund. を2類(詳細な産地及び日附不明)見出した。之れで奄美本島にも確實に本種が産することが明かになつたわけである。

## 日本産天牛類の研究史(豫報)

大 林 一 夫

日本の天牛類は1787年に瑞典の博物學者 *Thunberg* によつて研究されたのを最初に1800年代に西歐の専門家たちの手で大半は研究され體系づけられた。1900年代に入つて補足的な研究とともに漸く我が國に於ても研究の手がつけられ、近々20年間に他の昆蟲部門に比を見ないほど多くの研究者たちによつて研究され、日本の天牛類の知識は長足の進歩を遂げている。しかし研究上不可缺の基本標本の多くは外國にあつて容易に實見することが出來ず、文献の入手にも一方ならぬ苦勞を要する我が國の狀態から先輩の業績を無視し、獨善的な研究内容をもつ報告の現れてゐるのは甚だ遺憾である。筆者は岡本半次郎博士の御指導のもとに天牛類の研究を始め、以來、文献の蒐集につとめてきたが、不幸なる戦争は外國文献の入手を中絶せしめて久しく、まことに不備不完であり、よく廣汎な日本産天牛類の研究史を書き上げるには足りないが、豫報として一應取まとめ、同好の士の参考に供したいとともに諸先輩の御叱正を仰ぎ度いと思ふ。

1787 (XII, 19); *Thunberg, Carol. Pet.*: *Museum Naturalium Academiae Upsaliensis. Dissertatio, Pars 4, pp. 44—58, pl. ref. p. 57, nota 10, fig. 3.* —ここに現れた *Saperda japonica* なる種類が日本で最初の天牛であり、記載は“*Lutea thorace immaculato, capite antennisque excepta basi nigris.*”と至極簡単なものである。附圖は翅鞘の先端だけが黒くなつてゐる。これでは全然記載と圖が合致しない。これが *Dalman* (1817)によつて彼の *Saperda fricator* の下に質問的に置かれ、更にこれらは *Gemminger & Harold* (1868—1876)によつて *Nupserha* 屬の中に含め、*Kraatz* (1879) は *Bates* の *Oberea marginella* (1873) と同じものだろうとし

て屬を *Nupserha* (?) に移した(この變遷は Kraatz に依る)。ところが Bates は *Oberea japonica* (1873) といふ種を發表してゐるので Thunberg の *japonica* が *Oberea* に入るとすれば その名前を先取されるので *O. niponensis* (1884) と新名を附し Thunberg の記載は不充分で當時の天牛研究者から彼の種は omit され Munich Catalogue にも出てないときめつけた。Junk の Col. Cat. 天牛科を擔當した Stockholm の Aurivillius (1923) は Thunberg の *japonica* も Bates の *japonica, niponensis* も同一のものとし、Thunberg の原圖について(non fig.)と註を入れた。Thunberg の標本は Upsala に残つてゐるとのことであり、Aurivillius ほどの天牛の大家であり(non fig.)と註を入れるほどの自信があれば同一國內にある標本なら一應再檢してゐるものと考えても宜いのではなからうか。神戸にいた J. E. A. Lewis が British Museum へ送つたものが Bates の *japonica* の記載に一致する *O. japonica* Thunberg と同定されていたことは既に筆者(1936)が報じた。ここまできて附圖は全然ないものとして原記載をもう一度讀みなおすと、所謂リンゴカミキリは *Oberea japonica* Thunberg で良いように思ふ。これ以上疑問を持つなら type specimen を調査する他はない。なお Thunberg は Stavenisse 號に乗つて Batavia から長崎へ 1775年8月14日に着いている。時に 33才。それから和蘭使節に従つて江戸に参府し、1776年12月3日に日本を去つている。勿論この *O. japonica* は彼自身の採集したものであろうし、なお發禁になつたまま入手し得ないが、山田珠樹譯「ツンベルグ日本紀行」の中に翅筋に白條があるカミキリ *Cerambyx rubus* を採集したという記事があつたように記憶する。或はシロスヂカミキリのことではなからうか。

1841; *Castelnau et Gory* : Hist. Nat. Icon. Ins. Col., p. 101, pl. xix, fig. 120. この報告は未だ入手の機會を得ないが日本産として *Clytus quinquefasciatus* が記載されたことが文献上に現れてゐる。

1844; *Guerin-Meneville*, Icon. Regne Anim. Ins. この報告も未だ見る機會を得ず *Purpuricenus* (*Sternoplistes*) *temminckii* (p. 224), *Oplophora* (*Callimation*) *sieboldii* (p. 238) の2種が日本より記載されていることを水戸野氏の天牛目録より逆引して承知しるに過ぎない。

1857; *Thomson, M. James* : Archives Entomologiques ou Recueil Contenant des Illustrations d'Insectes Nouveaux ou Rares. Tome I, pp. 514, pls. xxi, Paris. 本書の中で *Tetraopthalmus japonicus* (p. 51) という新種が日本から記載された。しかしこれは後年 Gahan (Trans. Ent. Soc. Lond., 1901, pp. 51-52) は *Astathes* 屬に移し Thomson の基本標本と東南ボルネオ産の一變種を調査研究した結果「非常によく似ており、基本標本は多分ボルネオかジャバから來たもので恐らく日本から來たものではあるまい。この標本のほか *Astathes* のどんな種類も日本から記録されていない」と述べ産地も日本を擧げず疑問符だけをつけて、日本に産することを否定している。その後多くの學者は本種を日本の fauna から抹消していたが、水戸野氏は氏の天牛目録中に再び採用した。しかし筆者は本種のような特異な種類が日本から採集されたことは一度も見聞したことがない。正確な記録が現れるまで一應除外するのを至當と思ふ。

1857(I, 1); *Motschulsky, Victor de* : Insectes du Japon, Etudes Entomologiques, vi, pp. 25-41, ref. pp. 36-37. この報告は伊豆下田附近で Gaschkewitch が採集した昆蟲類中の甲



蟲類について記載したもので、天牛は *Prionus insularis* (♀) (p. 36), *Purpuricinus spectabilis* (♀) (p. 36), *Purpuricinus japonus* (♂, ♀) (p. 37) の3新種が書かれた。

1860(XI, 1); Motschulsky, V. de : Insectes du Japon, enumeres, Etud. Ent., ix, pp. 4~39, ref. p. 19. この報文では *Cerosterna glabripennis* Motschulsky を新に日本の fauna に追加した(これは Bates (1873) によつても踏襲されたが現在の智識では日本に産することは確認されず、日本にゐるものは近似種 *Melanauster chinensis* Forster var. *macularius* Thomson(1865) であるから、兩種を區別することなく混同したものと考へる。)なお *Callidium rufipenne* (p. 19) を新種として記載し、*Purpuricinus japonus*, *P. spectabilis*, *Prionus insularis* の3種を再録した。

1861 ; Motschulsky, V. de : Insectes du Japon, enumeres (Continuation), Etud. Ent., x, pp. 3~24, ref. pp. 20~21. 前記報文の追加として *Strangalia tenuicornis* (p. 20), *Stenura ochraceofasciata* (p. 21) の2新種を記載するとともに *Prionus insularis* (♂) …p. 21 の記載を行った。

1863 ; Chevrolat : Clytides d'Asie et d'Océanie, Mem. Soc. Roy. Sc. Liege, xviii, p. 298. *Anthoboscus japonicus* を記載されたことが文献に現れているが未だ見ることが出来ない。

1864~55 ; Thomson, J. : Systema Cerambycidarum. Liege (Mem. Soc. Roy. Sc. Liege, xix) の文献も見ることが出来ないが *Uraecha bimaculata* (p. 85), *Hulaconotus pachypezoides* (p. 99), *Cagosima sanguinolenta* (p. 116) の3新種、*Glenea galathea* (p. 566) の1新種が日本から記録されたように文献に出ている。

1866 ; Motschulsky, V. de : Catalogue des Insectes regus du Japon, Bulletin de la Societe imp. des sciences naturelles, Moscou, xxxix, pt. 1, pp. 163~200. ref. pp. 174~175. 既に自身で記載したものの7種の再録を行うとともに2新種を記載追加した。既に *Prionus insularis* (*insularis* の誤植) (p. 174), *Purpuricinus japonus* (p. 174), *P. spectabilis* (p. 174) *Callidium rufipenne* (p. 174) 及び *Callidium albofasciatum* (p. 174), *Pogonocherus granulatus* (p. 174) の2新種を含め *Cerosterna glabripennis* (p. 175), *Strangalia tenuicornis* (p. 175), *Stenura ochraceofasciata* (p. 175) の9種である。

1869; Lacordairé, Th. : Genera des Coleopteres, Paris, ix, p. 47. *Sympiezocera japonica* が新種として書かれたと文献上で知っているに過ぎず、入手出来ないでいる。

*Aurivillius* は Junk の Col. Cat. (1912) と Bates の *Phymatodes albicinctus* (1873) を本種の synonym とし、種名を *Callidium* から *Phymatodes* へ編入したため語尾を変化させて *albofasciatus* とした。水戸野氏は日本天牛目録(1940)で Motschulsky の *albofasciatum* を Bates の *albicinctus* の synonym とし、*Aurivillius* の *albofasciatus* を nomen nudum として破棄している。*albofasciatum* が homonym として破棄されない以上逆に *albicinctus* が synonym であり先取権は當然 Motschulsky にあつてシロオビカミキリ(シロオビチビヒラタカミキリ)の學名は *Aurivillius* の説の如く *Phymatodes albofasciatus* Motschulsky とするのが正しいと思ふ。



1871; Pascoe, F. P.: Descriptions of new Genera and Species of Longicorns, including three new Subfamilies, Ann. Mag. Nat. Hist. (4) viii, pp. 268-281, pl. xiii, ref. pp. 277-278. この報文中、日本産として對島から Arthur Adams によつてもたらされた *Scotinauges diphysis* (p. 277, pl. xiii, fig. 4) を新屬新種、長崎産の *Pothyne silacea* を新種として計 1 新屬 2 新種を記録した。

以上解説したものが日本産天牛類の劃期的研究を行つた 1873 年の Bates の研究以前の黎明期の研究であり、發表された總種数は 21 種に達するがそれらのうち synonym が 1 種あるので僅か 20 種に過ぎないことになる。これを現在の我々の知識によつて整理すると次の通りである。

*Prionus insularis* Motschulsky ノコギリカミキリ

*Strangalia tenuicornis* Motschulsky ツマグラホナカミキリ

*Stenura ochraceofasciata* Motschulsky = *Strangalia* ヨツスデハナカミキリ

*Sympiezocera japonica* Lacordaire = *Semanotus japonicus* スギカミキリ

*Callidium rufipenne* Motschulsky ヒメスギカミキリ

*Callidium albofasciatum* Motschulsky = *Phymatodes albofasciatus* シロオビカミキリ

*Anthoboscus japonicus* Chevrolat = *Chlorophorus* コクロトラカミキリ

*Clytus quinquefasciatus* Castelnau et Gory = *Chlorophorus* ヨツスデトラカミキリ

*Purpuricinus spectabilis* Motschulsky = *Purpuricenus* ヘリクロベニカミキリ

*Purpuricenus (Sternoplistes) temminckii* Guerin-Meneville = *Purpuricenus* =

*Purpuricinus japonus* Motschulsky ベニカミキリ

*Cerosterna glabripennis* Motschulsky = *Melanauster chinensis* var. *macularius* Thomson マダガラカミキリ (の同定の誤り)。

*Oplophora (Callimation) sieboldii* Guerin-Meneville = *Eupromus ruber* Dalman ホシベニカミキリ

*Uræcha bimaculata* Thomson ヤハズカミキリ

*Scotinauges diphysis* Pascoe = *Moechotypa* ハラアカコブカミキリ

*Pogonocheus granulatus* Motschulsky アレハダネジロカミキリ

*Rulaconotus pachypezoides* Thomson タテジマカミキリ

*Pothyne silacea* Pascoe シロスデドウボソカミキリ

*Glenea galathea* Thomson = *Menesia sulphurata* var. *galathea* ヤツキボシアサヒカミキリ

*Gagosima sanguinolenta* Thomson ハンノキカミキリ

*Saperda japonica* Thunberg = *Oberea* リンゴカミキリ

## 大蚊類三種に就て

三 島 敏 夫

1. クチナガガンボ *Elephantomyia hokkaidensis* Alexander

本種は江崎博士 (日本昆虫圖鑑 p. 204, 1932) に依ると「北海道の山地に普通なるも未だ他よ

り発見せられず」との事である。又最近同博士より「九州にもそれらしいのが採れた事あるも北海道のものと比較しないと確かにそれかどうか判らない」との御教示を賜つた。筆者は本年(1947)8月21日岐阜縣益田郡秋神高原で本種の1♀を採集することが出来たので本州に産することを報告する。

### 2. クチバシガガンボ *Helius tenuirostris* Alexander

本種も江崎博士 (loc. cit. p. 196) に依れば「北海道の山地に産し又本州及び九州の山地にも稀に発見せらるるも多からざる種なり」とある、現在迄に筆者の知れる採集は次の通りで本州にては廣く産し特に金華山には普通である、岩手縣門馬 viii-1, 433 (齋藤榮, 昆虫界 vol. 8, No. 7, 6(1940) 石川縣白山 1 δ. vii-24, 447 (志津匡三) 大阪府箕面 1 δ ix-9, 447 (筆者採集) 岐阜市金華山 5 δ. vi-30, 447 (筆者採集)

### 3. ウスモンガガンボダマシ *Trichocera maculi* Pennis Meigen

本種は徳永博士 (日本動物分類 Vol. x, Fas. vii, No. 11, 1939) によれば、本州近畿地方の平地森林より知られ歐洲北米其他舊北區の寒冷の地に普通といわれる。筆者は III-14, 1947, に岐阜縣本巢郡一色村(岐阜市郊外)にて電燈に飛來せる1♀を採集した、尚近畿地方では普通の様で筆者の採集例は次の通りで全部電燈に飛來したものである。大阪府豊中市 1 δ III-26, 447. 同 1 ♀ III-27, 447. 大阪市天満, III. 447.

## 編輯後記—發刊の辭にかえて

平和立ちかえるの日、それは祖國の敗戦という厳しい現實のもとではあつたが、私たち蟲の好きな同人が集つてお互の研究を發表しあう雑誌を持ちたいと思ひ、發刊の計畫を林君に書送つたのは終戦直後であつた。ようやく中根、黒澤、三島君たちの原稿に私たちの原稿を加へ、これで創刊號を出さうと決意したのは昨年秋で、それがまた今日まで延びてしまつた。しかも出来上つたものは私たちの理想に遙か及びもつかないものである。色んな蟲の雑誌が出ているとき、あえてこの雑誌を發刊するのは、まだ判らないことの多い日本の蟲界へオリヂナリテイを持つた新しい事實を記録して行き、或いは古い記録を整理し、少しでも多く蟲のことを一般に知らせ、私たちの智識の一步前進に貢献したいためである。蟲の好きな同人の聲援により號を追うて充實したものにして行くつもりであり、どうか入會とともに研究の寄稿をお願いし、あわせて雑誌について心隔てのない批判をお願いする (大林一夫)

蟲の好きな人は誰でも、入會し、寄稿できます。申込は大林宛に、會費は實費制、機關誌は年2回發刊の豫定につき振つて御入會の上御研究を御發表願います

昭和二十三年四月二十五日印刷

昭和二十三年四月二十八日發行

編輯人 岐阜市千石町一ノ一五 大林一夫

發行人 大阪市東區平野町五ノ二七 林 匡夫

印刷人 大阪市旭區新森小路中二丁目九四

宏榮社印刷所 阪井辰雄

發行人 大阪市東區平野町五ノ二七 林匡夫方

蟲の友の會